

## 『台湾見聞録』

～野牛の会50周年記念旅行～

### 1. はじめに

野牛の会50周年記念特別行事として、平成18年10月26日から31日まで、JTBの『台湾まるごと大周遊 6日間』に参加して、14名の仲間と共に台湾一周の旅を堪能してきた。このツアーは、台湾の三大都市である台北、高雄、台中の他に台南、台東、花蓮という台湾のほぼ全域を網羅した“台湾まるごと”のタイトルに恥じない大周遊旅行であった。

九州ほどの小さな島でありながら、3,000m級の高山が連なる台湾の自然は、実に豊かである。島の中央を北回帰線が横断し、以北は亜熱帯、以南は熱帯、高山の上は温帯・寒帯が広がる多様な自然に彩られた、世界でも珍しい島である。人々の穏やかな気質と繊細な優しさは、心の琴線に触れ、ほっと癒される。そんな台湾を気の置けない仲間たちと巡ってきた。これはその見聞録である。

小さな島国とは言え、わずか6日間で全島くまなく回るのだから、観るところがピンポイントになるのはやむを得ない。毎日が移動日で、古稀を目前にしたシニアにとっては、かなりの強行軍だったはずだが、まるで修学旅行生のように、朝から晩まで嬉々としてはしゃぎまわり、疲れを感じさせない元気な姿で全日程をこなしたのは、健啖家ぶりと併せ、驚くばかりだった。

野牛の会で、台湾を訪れたのは、35年前(昭和46年)の10周年記念旅行に続いて2回目である。この時もJTBにお世話になった。前回は4泊5日で、訪れたところは台北と花蓮だけだった。それに比べ、参加人数も訪問先もはるかに広がり、会員のこの旅行に対する期待の大きさを感じた。会の公式行事として、海外旅行に行くのは、恐らくこれが最後だろう。それが参加意欲を駆り立てたのかもしれない。

10周年旅行当時、われわれは、職場の中堅として、働き盛りであった。その後、企業戦士として、台湾とかかわりを持つようになった者は少なくない。駐在員など直接仕事でかかわった者は、小生はじめ芦澤君、安西君であった。労使の関係でいえば、市川君や黒部君も公用で台湾を訪れた。中條君も技術指導のために訪れた一人である。10周年以来の参加者では、藤枝君と鈴木君がいる。そういう意味で、野牛の会と台湾は因縁浅からぬ関係がある。

### 2. 張董事長主催晩餐会

今回の目玉行事として、台湾関係者と夕食を共にしたいと考えたのは、こう言った背景があった。日哥電子だけでなく歌林の人達とも旧交を温めたいと思ったが、過ぎ去った歳月は如何ともし難く、所在、連絡が取れず、結局、張碩藩、鵬遠父子との再会に留まった。そんな中で、張さんには最大級の熱烈歓迎を受け、言葉に言い尽くせない感謝、感激があった。

本来、当方で招待すべきところ、水臭いと一蹴され、“友達方より来る、また楽しからずや”とばかり、さっさと豪華な宴席を用意してくれた。張さんのいつに変わらぬ温かい人柄に接することが出来たことが、なによりのよろこびであった。また、同行した仲間に張さんを紹介し、仲間も張さんに会えたことをよ

ろこんでくれたこともうれしいことだった。

出掛ける前に、張さんへお土産は何がいいかと尋ねたら、こっちは用意しないから手ぶらでこい、とのことだった。そうはいかないので、奥さんへという名目で、日本的なものを選んで持参した。虎屋の羊羹、乾燥椎茸、煮あわび、マグロの味噌漬け、煎餅それにリンゴだった。これとは別に斉藤さんが手作りの買い物袋、折り鶴などを差し上げた。奥さんが大変喜んでくれたとの報告が芦澤君よりあった。

義理と人情は、死語に近い昨今だが、仁義に厚い張さんの温かい人柄に接すると、台湾にはいまだに古きよき時代の日本の風習が残っていると感ぜずにはいられなかった。

### 3. 食在台湾

それにしても、久し振りに味わう本格的な上海(浙江)料理であった。“食は台湾にあり”が、小生の経験上得た確信である。本来の語源は、“食在広州”である。たしかに本土の中華料理は、うまいところが少なくない。しかし、総合的な評価をすれば、台湾がNO.1である。これはなにも小生が勝手に決めたことではなく、今や“食在台湾”が当たり前になっている。

その理由はいくつかあるが、それはここでは触れない。台湾には広東料理をはじめ、北京、四川、湖南、潮州等々代表的な中華料理店がキラ星のようにある。「江南春」もそのひとつである。こういう店で、14品もの特別料理を味わうことは、最高の贅沢である。美食家の張さんならではの選択である。張さんの気配りが伝わってきただけでなく、仲間に本物の中華料理を味わってもらえる機会になったことがうれしかった。一同、紹興酒との絶妙なコンビネーションに感歎しつつ、ついつい度を過ぎた。

小沢君から、この日ご馳走になったメニューの解説をしてほしい、と写真を添えて依頼があった。料理名と写真が一致しないで悩んでいる、と書いてあった。台湾駐在の経験者なら、たちどころに分かるのでは、と考えている様子だった。残念ながら、そういうわけにはいかない。それじゃ実も蓋もないから、国際交流協会の中国人理事に翻訳をしてもらうことを考えている。

このツアーをひと言でいえば、“ホテルは一流、料理は三流”というのが、小生の率直な評価である。ホテルについては、どこも言うことなしだった。最終日の昼食を除いて、全食事付きであったが、“食在台湾”に匹敵する料理はなかった。中でも、嘉義の“一葉”で食べた「和風台湾料理」はいただけなかった。むしろ純粹の「台湾料理」の方こそ、みんなに味わってほしかった。59,800円という料金からすれば、やむを得ないところである。それだけに、「江南春」の料理がダントツに光り輝いていた。

台中の夕食は「客家料理」だった。小生にとっては初めて味わう料理だった。客家(ハッカ)は広東省の山岳地帯に住む種族で、教育熱心で結束の強い一族といわれている。孫文、鄧小平、李登輝、リークアンユーなど多くの逸材を輩出している。客家料理は、食材が少ない山岳地帯の料理のため、質素だといわれている。われわれが食した料理もそんな感じがした。

台湾には、高級料理だけでなく、庶民の味として、水餃子、小籠包、担仔麵、虱目魚(サバビー)粥など安くてうまい一品料理が数多くある。こういったものを味わう機会があまりなかったのは残念だった。

そんな中で、最終日の駅弁はなかなかのものだった。列車の旅の楽しみは駅弁である。列車に乗るなら、ぜひこれを体験したいと思っていた。かつては、車内販売があったので、今回も車内で買えるものと思っていたが、これは予想が外れた。主要駅には駅弁があって、中には名物弁当もあるとも聞い

ていた。しかし、1～2分の停車時間では、駅に降りて買うわけにもいかず、諦めかけていたところ、芦澤君が孤軍奮闘して車掌に談判した結果、次の駅に電話をして14個のホカ弁を手配してくれた。台湾の国鉄も粋なことをしてくれるものだ。これも弁当の味を、値段(50元 = 200円)以上に上げた理由だろう。一緒に回ったツアー客も羨ましがにわれわれの駅弁を見ていた。

昔は、と、つい“昔”話になってしまうが、台北、高雄間には、「莒光号」と「観光号」という特急列車が走っていた。この列車には、スチュワーデス(これも昔の言い方、今はフライトアテンダントという)並みの美人ホステスが乗っていて、お絞りとウーロン茶のサービスをしてくれた。今回われわれが乗車した列車は、「自強号」という特急列車だったが、残念ながら美人ホステスに会う機会はなかった。

特急列車といえば、日本の新幹線が、年内に台北、高雄間を走ることになっている。トラブル続きで運行開始が遅れているが、いずれ観光の目玉として脚光を浴びることだろう。

#### 4. 市川君と車椅子

市川君が参加してくれたことは、張さんに再会できたことと合わせ、うれしいことだった。行動に制約があることから、最初は逡巡していたが、なんとしても一緒に行きたいという強い意欲の結果、介添役として甥の辺見太郎君を連れていくなど、最善の方法を講じて参加した。われわれも彼の意気込みに感動し、全力でバックアップすると約束した。

しかし、初日の行動や乗り降りを見て、本人が言うまでもなく、車椅子を持ってこなかったことは失敗だったかな、と後悔の念に駆られた。ガイドに尋ねたら、JTBの台北支店に数台あるという。電話で確認してもらったところ、すでに先約があって、振り向けられないとのことだった。ホテルに着いてフロントに聞いたら、備え付けはあるが、持ち出しは不可とのことだった。窮余の策として、張さんに相談することも考えたが、夜も遅く返却方法も思いつかないため断念、仲間でなんとかしようと思いを固めた。

車椅子が空港や故宮博物院にあることは、事前の調査で分かっていた。実際には、この他にもホテルや駅で借りることが出来た。中でも、高雄の夜市(六合二路)を車椅子で見学できたのは、想定していなかっただけによい思い出になっただろう。庶民の盛り場として賑わう雑踏の中を、途中、台南麵まで食べながら通り抜け出来たのは、もともと好奇心の強い市川君だけに、よい体験だったに違いない。

とは言え、車椅子の活用は限定的だった。観光地や道路など、バリアフリー化が進んでいないことを嫌というほど見せつけられた。最初から覚悟はしていたが、時には、車内に留まり、時にはバスの近辺で待機してもらうなど、彼には気の毒なことをさせた。介添えがあったとは言え、杖で歩くことは大変なことだ。肩に力が入り、全身の筋肉疲労が大きかったことは、彼の手から痛いほど伝わってきた。

それでも、ほぼ全行程を他のツアー客に大きな迷惑を掛けずに回ることが出来たのは、太郎君や仲間の介添えがあったからだ。それなりの苦労はあったが、“案ずるより生むが易し”で、本人も自信を深めただろうし、われわれも貴重な体験をした。なんと言っても、彼の前向きな姿勢と健闘を称えたい。

#### 5. 名所旧跡

私自身は、このツアーに挙げられていた名所旧跡は、ほとんど体験済みだった。今回初めて訪れた先は、東海岸線沿いの三仙台と八仙洞、それに知本温泉だった。台北から高雄までの西海岸線平野

部は、三大都市を中心に、政治、経済、文化の中心として発展してきた。これに対し、東海岸線、すなわち太平洋側は、中央山脈を隔てた断崖絶壁に阻まれ、開発が遅れてきた。台湾ツアーも花蓮や太魯閣溪谷までは行くが、花東海岸まで行くツアーは珍しい。

中央山脈の西と東では、あらゆる面で歴然とした格差がある。ガランビ岬から景色が一変する。厳しい環境条件故に、太平洋側には自然の景観が残されている。駐在中、数回車で走った経験はあるが、その後開発が進んだと聞いていたので、花東海岸を走るのを楽しみにしてきた。あいにく荒れた天候で、太平洋の景観を味わうまでには至らなかったが、未開発の魅力を秘めた地域であることに変わりはない。経済的にも取り残されていて、過疎化が進んでいる。それだけに三大都市にはない素朴な雰囲気漂っていた。

知本温泉は期待に違わずよかった。ホテルは、日航系列の“知本老爺大酒店”だけあって、日本式の温泉宿だった。浴場も大浴場と露天風呂があった。旅も終わりに近づき、畳の部屋と温泉に浸ることができ、つかの間の休養を取ることが出来た。余興にヤミ族(雅美)による民族舞踊があった。ヤミ族はバシー海峡の北端、太平洋上に浮かぶ蘭嶼島(俗称“はだか島”)に住む半農半漁の高砂族だ。ロビーには、“タタラ”と呼ぶ漁労用のカヌーが展示されていた。この種族は4,000人しかいないそうだ。その意味では、この種族に出会えたのは珍しい。

太魯閣(タロコ)は前回も訪れた。前はYS-11で、松山空港から花蓮空港まで空の旅だった。道路は幾分整備されたが、今も難所であることに変わりない。蒋介石が連れてきた兵隊の失業対策事業として、台中に至る東西縦貫道路となった。この道路も車で走った経験があるが、途中“梨山”という平原がある。名前の通り梨の産地だ。ここまでくる観光客はいない。阿里山を含め見所はまだある。

話は前後するが、高雄は駐在時代頻りに訪れた都市である。それだけに、日哥電子のあった楠梓と、日立電機のあった高雄は、懐かしさを感じながら、車窓から目を凝らして眺めた。当時は自転車の洪水とスモッグに覆われた公害の街であったが、その両方とも消えていた。工業都市高雄も、重化学工業からハイテク産業に変わったからだろう。

高雄には、今回訪れなかった“澄清湖”という景勝地がある。蒋介石の故郷にある湖に似ているといわれ別荘もある。この湖の一部は禁猟区になっていて、釣りは禁じられていた。日哥電子に技術指導で駐在していた峯村昭一君が、休日にここで釣りをして、警察にしょっ引かれ、そのもらい下げに行った思い出がある。張さんとは、ここにあるゴルフ場でよくゴルフをした。

道路のあちこちに檳榔(ピンロウ)を売るスタンドが目についた。檳榔は昔から台湾人の嗜好品として町角で売っていた。当時はリヤカーに積んで、ジイちゃんバアちゃんが細々と商う生業だった。ところが、数年前、突然セクシー産業に衣替えして、リニューアルオープンした。水着やネグリジェといった過激な姿の売り子が、ネオン灯で囲まれた小さなブースの中に、浮かび上がる仕掛けになっている。このアイデアが当たって、瞬く間に全島に広がった。

品位を汚すということで、台北周辺では禁止になったいわゆる新商売である。台湾では、昔から“風俗産業は南から”と言われている。過去にも大ヒットした“理髪店”(説明略)がある。知恵者、ダイヤモンドは南にいるらしい。日本の“流行は西から”に相通じるところがある。

## 7. 買い物

小生のねらい目は、どこに行ってもアンティーク(陶磁器と木彫り)の掘り出し物だ。しかし、今回はフリータイムがほとんどないので、じっくり品定めする時間はないと覚悟を決めていた。そんな中で、陶磁器は赤嵌楼の門前町にある老舗の茶屋に的を絞って行った。ここは前にも2点ほど買った店である。本業は中国茶の専門店であるが、老店主が趣味で集めた骨董品が無造作に陳列されている。前回逡巡して買いそびれた壺を、今度こそ手に入れたいと思っていた。

赤嵌楼の見学を放棄して、こっそり抜け出し、そこを訪ねた。お目当ての壺はなかったが、それでも気に入った品が数点あった。店には親父が不在で、老婆が一人留守番をしていた。おばあちゃんとは、片言の日本語と北京語で話しが出来た。親父はいないかと尋ねたら、昼食と午睡で家に帰り、3時半にならないと店に戻らないとのことだった。バスの出発時間は3時だったので、後ろ髪を引かれる思いで、その店を後にした。かくして、第1のお目当てはあえなく失敗に終わった。

第2のチャンスは、思ってもいないところで巡ってきた。花蓮の大理石工場を訪ねた時だった。その工場に登っていく坂道の角に、古い民芸店があるのをバスの窓から見つけた。大理石にはまったく興味が無いので、オバちゃんの長広舌を失敬して、民芸店に出掛けた。店は改装中で職人が作業をしていた。店員はだれもいなかったの、職人に断って中を見せてもらった。

ほとんどがガラクタだったが、壁に何点か原住民の作とおぼしきお面と木彫りが飾ってあった。店員がいないので、一巡してバスに戻った。ところが、商売熱心な大理石店のオバちゃんの引き止めにあつたとかで、出発時間が30分延長されたことが分かった。そこで、お面を収集している安西君を誘って、再びその民芸店に出向いた。

今度は、オーナーらしい浅黒い太った親子が食事をしていて、聞いてみると、高砂族(ルカイ族?)の末裔だった。オーナーの母親は、子どもの頃、日本語教育を受け、日本名を持っていたそう。客はめったに訪れないらしく、壁に架かった面と木彫りはほこりを被っていた。小生は、いにしえの生活場面を描いた木彫りの壁掛けが気に入ったが、かなり高いことを言うので、お面に切り替えることにした。

興味を惹いたお面は2つあった。1つは目と口がくり抜かれたいかにも原始的で、シャーマニズムの漂う真っ黒な仮面だった。おそらく祭事に使ったものだろう。もう1つはやや現代風で、顔の表情がはっきり浮き出た酋長の面だった。2つ買うからと、2人で値切って、小生は黒い面、安西君は酋長の面を買った。これが唯一の自分用のみやげ物となった。

町内や遊び仲間、英会話のクラスメート用には、コンビニやおみやげ店で、紹興酒、新東陽の乾燥肉、釈迦餅などの菓子類、お茶請けなどを買った。こういった類は、コンビニが発達しているので、フリータイムのない旅行者には、手軽に買って便利だ。新竹の米粉も、ドライブインで買うことが出来た。いずれも手ごろな値段で、数もあり、異国情緒があつて、好評だった。

## 8. むすび

当前のことだが、台湾もどんどん変わっている。ひと言でいえば近代化である。超高層ビル、高級ホテル、ブランドショップ、コンビニ、高速道路網、MRT、新幹線、モーターレーゼーションなどなど。逆に変わっていない点は、親日的で、茶目っ気があつて、楽天的な人々、それに食いものがうまいことである。

今回の旅で印象に残ったことを一つだけ挙げれば、“台湾化”が着実に進んでいることだった。台湾は、現在に至るまで、長い間、政治的に微妙な立場に立たされてきた。台湾独立運動や外省人对本省人の対立などである。しかし、蒋介石が率いてきた国民党および外省人の影響力が、世代交代によって相対的に低下してきた。その呪縛から解放されたかのように、蒋介石離れが進んでいる。台北新国際空港は、蒋介石の名前を取って「中正国際空港」と呼ばれていたが、最近になって「桃園国際空港」に改められた。

外省人の渡来とともに、北京語が標準語となったが、今では本省人(台湾生まれ)の言語である台湾語(福建語)が準公用語として認知された。北京語(中国では“漢語”という)は中国本土の公用語であるが、現在では“簡体字”という省略文字が使われている。台湾では、同じ北京語でも、漢字は昔ながらの“繁体字”が使用されてきた。それが、本土並みの“簡体字”が導入された。これは本土を意識した政治的な判断であると同時に世代交代による時代の変化に対応した改革だろう。

本省人出身の総統(李登輝、陳水扁)が続いたことによって、台湾を覆っていた暗い影が消え去り、台湾人本来の明るく開放的な雰囲気が蘇ってきた。陳総統夫人が公金流用で告発に追い込まれているが、これが政権交代の引き金になるのか、注目されるところである。

今回の最大の収穫は、9年振りに張さんに会えたことと半世紀に亘って付き合ってきた気の置けない仲間、楽しく旅ができたことである。これからも一部有志による海外旅行は続くだろうが、野牛の会の公式行事としては、恐らくこれが最後になるだろう。胸襟を開いて、酒を酌み交わしながら、古きよき時代の日本を想わず台湾を、共に巡ることが出来たことに感謝して、むすびに代える。多謝！！

以上

#### 【同行者名簿】

団 長	北田泰治	元台北支店長、「50周年記念旅行」発案者
副団長	丸橋春彦	事務局長役、現役時代ビジネスで何度か訪台
会 計	安西 博	元日哥電子非常勤董事、少数民族に関心あり
幹 事	芦澤富雄	元日哥電子工場長、連絡・調整係として貢献大
団 員	市川武雄	元労組委員長、組合代表で訪台、目下リハビリ中
”	豊村武司	ISOのプロ、市川の介添役を志願
”	藤枝信雄	10周年記念旅行参加者、俳人 受賞多数
”	鈴木皓二	”、それ以来の海外旅行
”	小沢成海	写真マニア、鉄道ファン、川柳の愛好家
”	出浦 進	入賞暦のある写真マニア、几帳面な資料編纂家
”	清水宏悦	海外旅行愛好家、居酒屋のオーナー
”	斉藤君江	”、主婦、手芸が得意
”	平山恵子	”、主婦、薙刀の県代表、登山が趣味、キナバル山登頂
ゲスト	辺見太郎	大学生、市川の甥、専属介添役で参加